

で、法華經に身を投じ、法華經の世界に生きるという絶
对的到達点から生じる眼なのである。この仏眼は、凡夫
の肉眼が五眼の力用を備えた眼であり、肉眼即仏眼とな
る眼である。更に、明鏡である、法華經という仏の未来
記に写映して現実世界を見る、自己を内省的に否定する
眼であり、常に現実へと還帰し、一切衆生の救済を實現
する眼なのである。

道元禪師の「眼睛」と日蓮聖人の「仏眼」は、共に自
己を否定するところに開眼する眼である。違いとしては、
前者が自己の常識的認識を否定するところに生じるのに
対して、後者は自己の主體的認識を否定したところに開
くといった、対照的な力用が指摘できる。つまり、道元
禪師は常識を脱落した「眼睛」によって、現実を無秩序
化し、その現実の中に秩序化以前の真理を覚知するの
に対して、日蓮聖人は、現実を法華經に映し出された未来
記として受け止める「仏眼」によって、現実を現実のま
ま、仏の本意である法華經が開顯する世界、仏界である
と覚知されたのである。

日蓮聖人にみる

病相の提示と治病

野 口 真 澄

日蓮聖人は、檀越の病や疫病という實際の病をきっか
けに、時には医療による治病をすすめ、あるいは仏天に
加護を祈っているが、一貫して説かれているのは法華經
による治病である。その教導は、既に指摘されているよ
うに（渡邊宝陽稿「日蓮の教説における個の病と時代の
病」宗教研究四九卷三輯所収）、「謗法の病」を治する
という目的が根底にすえられている。本発表では、こう
した教導がどのようになされたか、その一端を探ろうと
するものである。

疫病流行の報を受けて富木・四条両氏に送られた弘
安元年六月二十六日付の二通の消息（異称『治病鈔』、
『二病鈔』）では、ともに「夫人に二病あり」との冒頭
につづき、人には「身の病」（四百四病）と「心の病」
（三毒八万四千の病）があると、病を総括して提示され
ている。このうち「身の病」については「治水、流水」

等の名医によって治することが可能であるとして詳論されないが、「心の病」については「難治」という規準に立って詳しく説かれてゐる。すなわち「心の病」は、正像末の三時における仏法の乱れの問題として論じられ、特に今、末法における仏法の乱れから、この度の疫病流行が起こっているのであり、法華經に依る以外には治し難いと主張されている。

この二通の消息では、病の諸相が総括的に提示され、その中から「難治」という規準にもとづいて「心の病」の問題に集約され、末法においては特に仏法の乱れにその問題点が絞り込まれている。そこで、この「難治」という視点から改めて聖人遺文をみると、『観心本尊抄』等のいくつかの遺文において「末法為正」の文趣の一つとされる涅槃經梵行品の説示（『大正新脩大藏經』一一二卷四八一頁）が注目される。「七子の譬」とも称されるこの説示は、まさに涅槃に臨んだ釈尊が阿闍世王を罪から救つた理由を譬えたもので、父母は不平等ではないが七人の子どものうち特に病子に心をかけるといふものである。「難治」こそ問題とされる、また「病子」にこそ心がおかれるという論理に、共通点が見いだされるのである。

以上のように二通の消息においては、病全体を提示しながらも「難治」という規準のもとに末法における仏法の乱れに問題が集約されていた。ここから、日蓮聖人は「末法為正」という釈尊の御意を継承する法華經の弘通者としての立場に立ち、仏法の乱れをただす、すなわち「謗法の病」を治すという意味での法華經による治病を明示されたものと推察されるのである。

日蓮聖人遺文と

『法華經』の関連

関 戸 堯 海

玉澤妙法華寺に格護されている日蓮聖人の『法華經』の筆跡は、最も早いものでも文永九年以前には遡りがたく、最も遅いものは弘安初年に属し、大半は文永十一年から建治三年にわたって注記されたと考えられている。（山中喜八編著『定本法華經』解説を参照）その一方で、文永九年に佐渡塚原で執筆された『開目抄』には『法華經』と共通する引用文が数多く見いだせるの